

「邯鄲」の飛込み

小田 幸子

見所が多い「邯鄲」の中でも、文字通り目にも止まらぬ早態<sup>はやたて</sup>で観客を圧倒するのが「飛込み」の演技である。特に下掛りの型は鮮やかで、たとえば金剛流では「幕前から、台の上に置いてある枕を指して、一直線に走って」きて、「台のところで左の袖を巻き上げておいて、飛び上がって、その間に左下に体の向きを整え、団扇を顔にさっとあてる」(「弥左衛門芸談」)。この演技が印象的なのは、能には珍しいアクロパティックな妙技に興奮するからだけではない。夢が突如として断ち切られ、一瞬のうちに世界がひっくりかえってしまふ、その暴力的なまでの内的崩壊感を、走り、飛び、落ちるといふスピードと荒業を組み合わせて外在化した点が見事である。また、前後対照的な場面の転換点としてもすこぶる効果が高い。前の場面は栄華の極みに臨んだ主人公が高速度撮影映画を見る如くに日の出から日没、春夏秋冬の移り行く様を目前にして「面白や、不思議やな」と心躍らせる、物語り上最も高揚する箇所<sup>箇所</sup>に当たっている。それを引き継いで加速する謡に乗っ

て激しい動きがなされ、一転して静かな場面が訪れると、余りに急激な変化に心が追いつかず、茫然としている主人公の状態までがありありと感ぜられる。静かな演技ではこうした効果は期待できない。内容と結び付いて場面変化を効果的に見せると共に、夢中から目覚めに至る生理的・感覚的側面すらをも実感させてしまうのである。

しかし、これは古くから行われていた演技でもなければ、ポピュラーだったわけでもない。昔から人気の高かった本曲の型付は比較的多く伝存するが、江戸初期頃に飛込みが行われていた形跡がないばかりか、江戸中期から末期にかけても、少なくとも観世・喜多流では行なっていないようである。目覚めの場の型が知られる江戸初期以前の資料として、観世流の「宗節仕舞付」(1)と金春流の「安照仕舞付」(2)を次に抄出する。

(1)「有つるかんたんの」と云時分より台へあがり、「ねぶりのゆめ」と云時分又まへのごとく枕をし候てふし候。まへのいね姿にかへり候へぬやうにいね候。

(2)「みなきへ〜と失果て」うちハにて右のかたをさして、だいえあがる。「ねぶりの夢ハさめにけり」枕をしてねて、うちハをかほにあつる。

簡略ではあるが、走ったり飛んだりしていないことがわかる。他の型付も概ねこの程度の記述であって、傍線部のように前と同じ寝姿になるようにとの注意はよくみられるものの、臥す時の動き自体に言及することは少ない。重視されていたのはむしろ前者の方らしいのである。現在では「道成寺」の鐘入りと並び称される飛込みではあるが、「龍頭に手をかけ、飛ぶとぞみえし」と明記する「道成寺」と比較すると、わざわざ走ってきて飛ぶ必然性は薄く、眠りに付いた時と同一の形を取ることで場面変化は十分表現できるわけである。臥す過程に工夫を凝らした飛込みは、後代の考案になる公算が高いだろう。

もっとも、江戸中期以降になると、「台へ上り、ねむりの夢ハト横ニタラレ」(江戸中期下掛り「大本仕舞附」能楽研究所蔵)のように倒れ臥したり、「左ノ袖ヲ右ニテトリ、右足ヨリ上リナリニ伏。…早く右手ヲ降、伏ト一同ニウチヲニテ面ヲヲ、フ」(文化五年喜多十大夫伝授の型付。鴻山文庫蔵)など、素早く臥す記事も幾つかみえる。また、飛び上がる型も4例見付かった。金春流の「大蔵

家仕舞付」(能楽研究所蔵)を引用しておく。

「きへく」と失果て」と仕手柱の手にてすぢかへて橋かゝりの方をふみ留見て、左へ帰り、「かんだんの」枕をさして台へはねあがり、袖をうちハにてさきのごとくして臥也。

かなりのスピード感を持った演技が想像されるが(他の3例は「台へ飛びあがる」など簡略)、多くの中のごく数例にすぎない。

江戸後期から末期にかけて一部で行われていたらしい、飛び上がった素早く臥したりする演技が現在のケレン味を増して技術的に高度化し、重要な型所として広く認識されるようになったのは、明治期以降のことと思われる。池内信嘉は明治三十七年六月号の『能楽』の中で「シテの放れ技としては是れ全曲中第一の要所、飛込みて伏すあり、仏倒れをなすあり、膝を抜きて倒れるあれば、徐に臥すもあり、年の老若、舞人の思惑、種々の変化ある技所なり」と記している。「能

の見様、謡の聞き様)。飛込みのほかにも色々な仕方が行われている点も興味深いが、これほどこの箇所が注目を浴びるきつかけを作ったのは、桜間伴馬(左陣)ではなかったろうか。明治十二年に熊本から上京した伴馬が、同十五年五月十四日芝能楽堂で(邯鄲)を演じて観客を驚嘆させた出来事はよく知られてい

よう。とりわけ飛込みが評判を呼んだらしく、伴馬の息子金太郎(弓川)は「父が上京して来て、邯鄲を舞ひ、初めて認められましたので、それ以来邯鄲といへば、私どもの能のようになつて了りました」と回想し、飛込みについて「父は大部遠くから飛んだようですが、私などは台へふれないととべません」と述べている(『桜間芸話』)。また、『六平太芸談』によると、左陣の演技が余りにも素晴らしかったので、流儀にはない飛込みを思い切つて実行したところ、以後禁止されてしまったが、近來は誰もが演じるようになったという。

鮮やかな飛込みを一旦見てしまえば、それを欠いた(邯鄲)は味気無く感じられる。戯曲上のスリルが、演技上のスリルに置き換わるといえようか。一方では役者の意欲をかきたてずにはおかない。飛込みは各流に広まると同時に高度化し、横に寝る型が他にないこともあつて特殊性を強めていったと考えられる。

一般的に言えば早態は時代とともに減少する傾向にあつた。しかし、今日演じられている早態のすべてが昔からあり、現在と同じような仕方で行われていたのではない。本曲のような逆のケースは他にもあるに違いない。

(聖徳大学助教授)